

「企画調査」申請書の要約

今回、関数解析分科会の表現論・調和解析グループの幹事として、また慶応大学数理科学科からの依頼を受けてこの科研費を申請しました。「企画調査」の趣旨については、日本学術振興会の科研費申請の手引きを熟読ください。大事な点は、研究や研究発表には使えません。従って、今回の旅費の支給も「企画調査」のための出張ということになります。また、きちんと調査に参加したことを示す必要があるので、アンケートにお答えいただくことになります。

さて、実際に何の「企画調査」をするかという、以下が申請書の要約です。

(、 は頭の中の考えで、 、 、 が申請で書いたことです)

- : 学会の実函数論・関数解析学という分科の仕方は時代に即しているだろうか？
- : 1 が疑問なら、実函数論・函数解析学合同シンポジウムも合同にこだわらなくてよいのでは？
- : 合同シンポジウムは研究成果の発表、研究者の交流の面で成果がある。もっと発展させて、グループをまたぐ共同研究などを誘発できないか？
- : 海外などでよくある「PDE & Harmonic Analysis」のようなグループ、あるいは「調和解析」といった再構成を考えては？
- : 「表現論と解析調和解析」、「実解析学」、「偏微分方程式の関数解析的研究」のグループで(すみません、「作用素環・函数環」、「量子数理と作用素論」を無視したわけではありません。私が不得意なので、書くのに躊躇しただけです。実際は加わってください)新しい研究集団を模索してはどうか？
- : の方法として、何か共同研究あるいは重点研究を設定する。
その可能性と発表の場としての国際研究集会の開催などを企画調査する。

繰り返しになりますが、この「企画調査」は実際の研究や研究発表には使えません。あくまで、企画調査です。でも、実際、机に向かっていても、調査はできず、多くの皆さんと交流し、このような問題に対して議論することが、企画調査になると思います。参加される研究集会、シンポジウム、セミナーなどでこの話題を取り上げ、議論してください。